

杉田久女の俳句

—— ノラ の 背景 ——

倉 田 紘 文

(一)

杉田久女に次の一句がある。

足袋つぐやノラともならず教師妻

この句は大正十一年「ホトトギス」二月号に発表された句であり、『杉田久女句集』（昭和二十七年・角川書店刊）では中七が「醜ともならず」と推敲された形で入集されている。しかし再版本（昭和四十四年・角川書店刊）や『杉田久女全集』（平成元年・立風書房刊）では共に初出の「ノラともならず」に再び改められている。

久女は昭和二十一年に五十六歳で没しており、昭和二十七年の句集で「醜ともならず」となっていることについては、同句集が久女生前に自ら編集されていたという^{註⑥}ことで理解できるが、再版及び全集で「ノラ」に改められたいきさつは分らない。

私はこの小論で一句の制作年次（大正十一年？）と、「ノラ」の一語に対する久女の思い入れについて考察してみたいと思う。

(二)

足袋つぐやノラともならず教師妻

と同時に発表された句は次の四句である。

遂に來ぬ晩餐菊にはじめけり
戯曲よむ冬夜の食器浸けしまゝ
枯れ柳に來し鳥吹かれ飛びにけり
冬服や辞令を祀る良教師

これら五句（雑詠・虚子選）の初出を正確に記すならば、「ホトトギス」二月号（第二十五卷第五号）・大正十一年二月一日発行であり、更に詳しく述べれば、大正十一年一月二十六日印刷納本となっている。（しかし、これは表紙に刷られた年月日であり、奥付では大正十一年一月廿七日印刷納本とある）

そして、その奥付には、「課題」として、「第二十五卷第七号」（四月一日発行）——〈春の月・蛇笏選〉（他二名は略）として、締切二月十五日と掲載されている。つまり、その第七号（四月一日発行）とは四月号であり、募集は二ヶ月前（正確には一ヶ月前）には締切られている。

他に「文章」（種類は問はず）、「俳論」なども締切毎月十五日となっており、ここで特に注目すべき「雑詠・虚子選」も締切毎月十五日となっている。しかも「雑詠」その他の投稿については、「且つ凡ての投稿虚子宛よりも発行所宛の方便也」と明記してあるのである。

当時、高浜虚子は神奈川県鎌倉郡鎌倉町乱橋材木座千二百七十八

番地に住んでおり、「ホトトギス」発行所は東京市牛込区市谷船河原町十二番地にあった。虚子私宅と発行所とは別々なのである。

「ホトトギス」の雑詠句は発行所に送られ、一応毎月十五日に締切られた後、虚子に渡されて選句されるという手順を踏む。その中の入選句が編集子によって清書され、印刷所に持ち込まれることになる。(当二月号は池内たけしにより一月十四日に清書を終えたところ)

さて、そういうことから推察すれば、二月号の雑詠句として掲載されるためには、遅くとも前年の十二月十五日までに投句がなされていなければならないはずである。とすると、掲句「ノラ」の句の制作年次は当然大正十年ということになる。

ところが、清崎敏郎著『近代俳人』(桜楓社刊・昭和四十八年)、石川桂郎著『近代俳句大観』(明治書院刊・昭和四十九年刊)、宮崎惠美子著『研究資料現代日本文学』(明治書院刊・昭和五十五年)、小室善弘著『鑑賞現代俳句』(本阿弥書店刊・平成三年)など、その全てが大正十一年作となっている。これは、「ホトトギス」二月号での発表ということが単純にそうさせたときか思えない。

大正十一年「ホトトギス」三月号の雑詠欄には久女の句は掲載されていない。ところが同号の虚子の巻頭文「斯く生きて居る」の次に、「雑詠補遺」として

春寒の髪にはし踏む梳手かな 久女

唇をなめ消す紅や初鏡 同

初会におくれ来し目と見あひけり 同

の三句が入選掲載されている。これは一月十五日の締切日に遅れ、ことよっては一句目の「春寒」のように二月三日の立春をさえ過ぎてからの投句であったかも知れない、ということも考えられる。二月号の雑詠清書が一月十四日に終わったということと考え合わせれ

ば十分にその可能性はある。しかし、そのことはどうであれ、「初鏡」「初会」の句が示すように、これらの作品が大正十一年の年頭に作られたことにはほぼ間違いない。となると、

足袋つくやノラともならず教師妻

この問題の一句は、大正十年作であると言っていていいであろう。

(三)

「ノラ」の一句が大正十一年作であろうと大正十年作であろうと、そなたいして騒ぎたてることはないと言われるかも知れない。が、この「大正十一年」か「大正十年」か、ということは久女の「ノラ」としては重大な意味を持つのである。

ここで、この「ノラ」の句に対する解釈や鑑賞をいくつか上げてみよう。

① この夫妻の間には、性格的に越えがたい溝があったと見え、大正十年には、離婚話までもちあがっている。だが一旦嫁した以上はという、当時の女の気持ちと、二人の娘との離れがたい絆から、地味な中学校の教師の妻としての一生を送るという、心持を固めるのだった。そうした情を訴えんがために「人形の家」のノラを持ち出しているのは、当時としては新鮮で、個性的な発想であったといえよう。

(清崎敏郎・S48)

② ノラはイプセンの「人形の家」のヒロイン。同時の作に「戯曲よむ冬夜の食器浸けしまゝ」がある。弁護士の子ノラは「わたしたちの共同生活がほんとうの結婚生活になるようでしたらね。では、さようなら」と夫や子供を置いて家を出て行ったが、現実を醒めた眼でみつめながら作者はついにノラにはなれなかつ

た。大正時代に女性がイブセンの戯曲を読むこと自体珍しいことであったが、更に作者は俳人として生きる自意識の強い女性であった。

(石川桂郎・S 49^註)

④ 〈ノラ〉は言うまでもなく、女性解放で有名なイブセンの戯曲「人形の家」のヒロインである。夫から人形のように扱われていたノラが自我に目覚め、自己の独立・解放を目指して家出をする話である。(中略)目覚めた妻が生活上の矛盾や苦悩に忍従する姿が〈ノラ〉ともならずである。(中略)出奔したい自我を抑えて子のため諦観の道を歩もうとする久女のあわれさを感じる。久女三十三歳の時の作。まさに女盛りである。その女盛りゆえの自我であり苦悩であったとも推察出来る。

(宮崎恵美子・S 55^註)

⑤ 「ノラ」はイブセンの戯曲『人形の家』に出てくる女主人公。個人主義的自由を主張して家庭を出る新しい女。自分は家庭に不満を持ちながら、ノラのように敢然と行動することもできない、と自嘲的に言った。

(小室善弘・H 3^註)

⑥ 初出の「ホトトギス」(大11・2)では五句入選で、このときの五句の中には、「戯曲よむ冬夜の食器浸けしまゝ」「冬服や辞令を祀る良教師」がある。冬服の句が家庭内の物議をかもし、その頃から夫婦の仲は険悪になってゆく。句中のノラはイブセンの『人形の家』のヒロイン。妻を人形のようにしか扱わぬ夫に絶望して家を出て行くが、久女は耐えた。つましい教師の妻として、足袋のつくろいをしながら」

(上野さち子・H 3^註)

これらの解釈、鑑賞を見るかぎり、「ノラ」は全てイブセンの『人形の家』の「ノラ」である。そして、その「ノラ」への思いの

もととして、久女自身の結婚生活の苦悩と忍従が考察されいてる。それは時代的な面から言っても、或いは当時の久女の家庭的な面から見ても、どちらも全てその通りであったと思う。

イブセンの戯曲『人形の家』は一八七九年(明治十二年)の初演。

日本では明治四十三年に島村抱月が訳し、松井須磨子とのコンビで明治四十四年に上演され、大成をおさめている。この三幕ものの戯曲は周知のように、(主人公のノラが夫から単に人形のように愛撫されるだけの生活に堪えられず、ついに夫と子供をすてて家出をする)、即ち女性の自覚と解放の問題を提起した近代社会劇の代表的作品である。

島村抱月には家庭があつたが、やがて須磨子と恋に落ち、大正二年には同棲をはじめた。^註しかし、抱月は妻子との戸籍上の縁を切らないまま、大正七年十一月に悪性感冒で死亡した。その抱月を追って須磨子もまたその二ヶ月後の大正八年一月に自殺したのである。須磨子は三十四歳であつた。

『人形の家』は戯曲においても、そしてそれを演じた抱月と須磨子の実人生においても当時の世の注目を浴びている。久女の句「戯曲よむ冬夜の食器浸しまゝ」も、それであつた。

また、久女の当時の生活を示すものとして、息女の石昌子と松井利彦共編の「杉田久女と橋本多佳子」の年譜を引いてみよう。^註

〈大正九年・三十歳〉

大正八、九年頃は句作好調だったが、父の納骨に行き病を得、実家へ帰つたのを機会に離婚問題がおきた。小倉での生活が痛ましすぎると実家では考えた。

〈大正十年・三十一歳〉

七月、一年ぶりに帰倉。里方滞在中、母さよから子供のために辛抱して、夫が俳句を嫌うのなら俳句をやめるように説得され

た。編者（昌子）の記憶では、宇内は腹の悪い人ではないかわりに単純で、久女の離婚したいという気持を夜昼責めたてた。

亭主関白ともいえる時代だったので、久女は泣きの涙で家を飛び出さねば喧嘩は止まなかった。

と、ある。なお、大正十一年「ホトトギス」一月号の雑詠には

重ね着の頬皺よせて笑み貧し

が一句入選しており、同号にはまた、「十月十七日未明畠窓の下にて——虚子先生」と署名した「夜あけ前に書きし手紙」が掲載されている。その一部を抄出してみると

虚子先生。只今午前三時でございます。腹痛がして眼が冴えて眠れず、廁へ起きようとして雨戸をあけますと、狭い庭土へ、昼のやうに明るい月光が屋根かげをそれて、四角く落ちています。（中略）畠窓にたたずめば何とはなしに侘しさがこみあげます。三十こした女の淋しみと申しましょうか。幻滅の前へ立つた女、また人生の灰色を見た女。私のやうに常に多感に、孤独と悩みとを感じます女には秋はことに淋しうございます。（中略）親も、兄姉も、子も、夫も、共にありつつ、又友はありつつもなほ、墓場の如き寂しさと孤独。（以下略）

と、書かれている。ここには実生活の深い暗さが如実に顔を覗かせていると見てもいいであろう。こうしてみると、前述の各氏の解釈、鑑賞の『人形の家』の「ノラ」、それに久女の家庭的な悩みがそのまま

足袋つぐやノラともならず教師妻

となつたのは間違いない。

(四)

久女が「ノラ」を句に詠出した背景はこれで十分理解できる。そこでこの句の作られた時、即ち大正十年の冬ということがいよいよ重要になってくるのである。

大正十年十月二十二日の「大阪朝日新聞」に、「白蓮女史情人の許に走る」と題して、佐々木信綱門下の歌人・柳原白蓮がその夫伊藤伝右衛門にあてた絶縁状が原文のまま掲載された。

私は今あなたの妻として最後の手紙を差上げます。今私が手紙を差上げるといふことは、あなたにとつて突然であるかも知れませぬが、私としては当然の結果に外ならないので御座います。あなたと私との結婚当初から今日までを回顧して私は今最善の理性と勇氣との命ずる所に従つてこの道を執るに至つたので御座います。（中略）

私は折々我身の不幸を憐んで死を考えた事もありました。しかし私は出来る限り苦悩と憂愁とを押えて今日まで参りました。愛なき結婚が生んだ不遇と、この不遇なる運命を慰むるものはただ歌と詩とのみでありました。愛なき結婚が生んだ不遇と、その不遇から受けた痛手のために私の生涯は所詮暗い幕のうちに終るものだとあきらめたこともありましたが。しかし幸にして私にはひとりの愛する人が与えられ、そして私はその愛によつて今復活しようとしておるのです。このままにしておいては貴方に対して罪ならぬ罪を犯すことになることを恐れます。最早今日は私の良心の命ずるままに不自然なる既往の生活を根本的に改造すべき時機にのぞみました。即ち虚偽を去り真実に就く時が参りました。依つてこの手紙により私は金力を以て女性の人格的尊厳を無視する貴方に永久の袂別を告げます。私は私の個性の自由と尊貴を守り且つ培うために貴方の許を離れま

す。長い間私を養育下さった御配慮に対しては厚く御礼申し上げます。

二十一日

伊藤伝右衛門様

燐子

燐子とは白蓮の本名である。少々長い引用文であるが、ここにははつきりとイブセンの「ノラ」が居る。

白蓮の本名が燐子。明治十八年、伯爵・柳原前光の妾腹の子として生まれた。柳原家は京都の公卿。大正天皇の生母・柳原二位の局は白蓮の叔母にあたる。白蓮はいちど子爵・北小路資武と結婚して一子をもうけたが、二十歳で離婚。明治四十五年、筑豊の炭鉱王といわれた伊藤伝右衛門（白蓮より二十五歳上で、当時五十二歳）と再婚していた。

離縁状の中の「ひとりの愛する人」とは、後に白蓮の夫となる宮崎龍介である。龍介は中国革命の志士・宮崎滔天の長男で、東京帝国大学法学部の学生で、社会革命をめざす帝大新人会のメンバーの一人であった。（大正十年、白蓮より六歳下で三十歳）。龍介と白蓮との出会いは、別府市青山町にあった伝右衛門の別荘「銅御殿」（後ち、赤銅御殿と書くようになる）である。雑誌「解放」に発表された白蓮の戯曲『指鬘外道』を出版社大鑑閣で刊行の計画があり、その交渉の話をもって来たのが龍介であった。

「大阪朝日新聞」でこの絶縁状が公開されるやいなや、「日本のノラついに離婚」「囚はれ孔雀はかくて青空へ」などとも新聞報道されたというこの事件？を久女が知らないはずはなからう。

というのは、翌日（大正十年十月二十三日）の同じく「大阪朝日新聞」に、「久保博士の夫人に『崖から飛んで死にたい』と燐子は堪へ難い苦しみを告げた」という見出しで久保より江女史の談話を載せている。久保博士とは九州帝国大学医学部教授・久保猪之吉であり、夫人のより江は久女と共に「ホトトギス」の句友であった。

更に、別府の「銅御殿」には大正九年七月、高浜虚子が白蓮を訪ねて

この旅のこゝに浴をせしことを

の一句を贈っている。九州に西下した虚子の前年の行動について久女がこれまた知らないはずがなく、白蓮に対しての興味も持っていたにちがいないからである。

松井幸子に次のような考察がある。^註

宇内の実家も久女の実家も裕福な家庭であったが、小倉での生活は教師の給料のみの生活で、家事を手伝ってくれる人を雇うこともなく、家庭の主婦としての仕事のすべてが久女の手を必要としていた。当時の女流俳人の多くは、裕福な社会的地位のある夫を持っていた。特に九州では久保より江、橋本多佳子、歌人では柳原白蓮など、恵まれた女性が身近にいた。より江は九州帝国大学医学部教授久保猪之吉の夫人、夫と共に俳句を作っていた。多佳子の夫橋本豊次郎は、土建業橋本組の後継者で、大分に十坪の農場を有する資産家であり、白蓮の夫は炭鉱王伊藤伝右衛門であった。こうした人々と比較する時、久女の置かれた立場が、世間的に見れば貧しいというわけでもないのに、必要以上に久女を心理的に追いつめていたということができよう。

というように、久女と白蓮との関係を述べている。

白蓮の伝右衛門への「離縁状」が新聞で公表されたのが十月二十二日、その五日前の十月十七日に久女は先述の虚子宛「夜あけ前に書きし手紙」を書いている。

「三十こした女の淋しみと申しましょか。幻滅の前へ立った女、また人生の灰色を見た女」「親も、兄姉、子も、夫も共にありつつ、又友はありつつもなほ、墓場の如き寂しさと孤独」

この久女が、白蓮の出奔した記事、即ち「ノラ」になった姿にショックを受けなかつたはずがない。しかし、久女は家に止まつた^{ホトトギス}。そして、大正十一年二月、久女は小倉の日本基督教団鍛冶町協会で洗礼を受け、クリスチャンになった。問題の「ノラ」の句が「ホトトギス」に載つた直後である。

足袋つぐやノラともならず教師妻

久女の「ノラ」はイブセンの『人形の家』のノラであると同時に、より直接的には『日本のノラ・柳原白蓮』であつたのではなからうか。そのことをも含めて、大正十一年「ホトトギス」二月号の雑誌入選句の制作年次は、大正十年の冬（つまり十一月初旬から十二月初旬）詳しく立冬の日から、投句が十二月十五日に「ホトトギス」発行所に届くまでの間）でなければならぬのである。

なお、「銅御殿」に関して付け加えれば、大正九年五月、北原白秋により一方的に離縁状を送られて離縁された江口章子が、上女中という名目で同年七月～八月ごろ住み込んでゐる。別府市内の西法寺の叔母のところに寄つていたころであり、離縁という淋しさと自由さを味わつていた時である。その姿を、すでに龍介と恋愛中？の白蓮はどう思い、どう見ていたのであつたらうか。

また大正十年一月には、夫の男爵・九条良致に十年間ほとんど別居生活を強いられ、ひたすらに歌の道で心を慰めていた「心の花」の歌友九条武子も訪れている。結婚、夫と妻、愛や恋、それらのことについて互いに心を打ちあけていたのではなからうか。

その大正十年には野口雨情の「船頭小唄」が流行したという。

注

注①「昭和二十六年版『久女句集』では「醜ともならず」と改められているが、へノラともならずの斬新な措辞には及ばない。」（『鑑賞現代俳句』小室善弘）の意見のようなことで、再び改めたのであろう。

注②清崎敏郎『近代俳人』（桜楓社）

注③石川桂郎『近代俳句大観』（明治書院）

注④宮崎美恵子『研究資料現代日本文学』へ俳句（明治書院）

注⑤小室善弘『賞現代俳句』（本阿弥書店）

注⑥上野さち子『日本名句集成』（学燈社）

注⑦「演劇運動を起すに就ては、その事業のために必要な限り、兩人の恋仲を精神的に確く相守ると共に、おそくとも必ず式参年以内に準備を調べ、兩人正式に結事することを約束す」（抱月の誓約書）

注⑧『杉田久女と橋本多佳子』（牧羊社）

注⑨・この離縁状は白蓮の筆になるものではなく、友人の赤松克麿が書き、勝手に新聞社へ届けたもの。（田吹繁子「八雲」平成元年八月号―「毎日新聞」昭和四十二年六月二十六日朝刊より―）

・この文章を書いたのは、龍介の所屬していた東大新人会のリーダー・赤松克麿が、白蓮の手記や関係者の話を参考にして書いた。（漆原辰雄『おもいつくまま』―評伝白蓮夫人―私家版）

注⑩・注⑨に同じ

・白哲のインテリ、宮崎龍介と、炭坑成金の夫とくらべたとき、女流歌人として成長しつつあつた燦子の心はおなじ男でありながら、伝ネムと龍介では余りにも違いすぎる知性に、激しく揺れ動いたであらう。いわば彼女の著作『指鬢外道』が彼女の運

命を変え、「大正恋愛史」に日本のノラとして不滅の名を残したのである。（西沢爽『日本近代歌謡史・下』—桜楓社—）

注⑩松井幸子『話題源・詩・短歌・俳句』（東京法令出版）

注⑪当時、かならずしも白蓮の行動に同情があったわけではなく、むしろ批難のほうが大きかったようである。新聞に見る論談や、識者の批判は、「たとえ愛がなくなるとも、もっと綺麗な別れ方があったはず、白蓮の行動は裏切りの」など。（注⑩の西沢氏に同じ）。

— 平成四年十月五日 受理 —